

島根・出雲国府跡

1 所在地 島根県松江市大草町

2 調査期間 二〇〇一年(平12)五月～十一月

3 発掘機関 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

4 調査担当者 角田徳幸

5 遺跡の種類 国府跡

6 遺跡の年代 古墳時代・奈良時代・平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(松江)

出雲国府跡は、一九六八～七〇年の発掘調査によりその所在地が明らかになった遺跡で(本誌第一・二〇号)、一九九九年から遺跡

の範囲・構造の確認のため再び調査を行なっている。

調査地は史跡公園出雲国府跡の北側で、大型建物跡三棟、掘立柱建物跡三棟、祭祀遺構、溝などを確認した。

大型建物跡はいずれも東西方向に主軸をとり、長さ二五～二六m幅一〇～一

一mほどの二間×五間の建物である。掘立柱建物を後に礎石建物に建て替えている。このうち、一号建物跡と四号建物跡は廂付きで、両者が東西に並び立つような配置をとっている。また、四号建物跡では建て替え前に使われた径四〇cmのくり材の柱根が確認された。これらの建物跡は、出土した遺物から八世紀末に営まれ、一〇世紀前半には廃絶したと思われる。

掘立柱建物跡は大型建物跡とは異なり、いずれも主軸を南北にとる。遺構の重複関係から大型建物跡に先行することが判明しており、時期は八世紀前半から後半と推定される。

四号建物跡の西側では、一辺三・四m深さ一mあまりの土坑が確認された。掘削が砂層に達しているため湧水があり、底面には円礫が敷き詰められていた。その上では鹿の頭骨・刀形代・曲物・かご・斎串・須恵器などがまとまって出土した。形代や斎串といった祭祀遺物があり、何らかの祭祀が行なわれたのであろう。また、須恵器の中には「郡」「井」と墨書されたものも認められたほか、ブドウ・モモ・イネ・ヒヨウタン・ウリなどの植物遺体も確認された。土坑を埋めた土からは「意字」と書かれた墨書土器も出土した。時期は、遺構の重複関係から三号大型建物跡に先行し、出土した須恵器からみると八世紀後半のものと考えられる。

四号建物跡の東側には、これらの施設群を取り囲むものと想定される南北方向に伸びる四号溝がある。幅三～四m深さ〇・七mで、

この埋土を掘り込んで四号大型建物跡・礎石段階の廂が設けられている。溝の中からは多数の遺物が出土しており、「館」「介」などといふ書かれた墨書土器、文書箱蓋が出土したほか、鞆羽口・鍛冶滓・埴埴など金属器生産、筋砥石・碧玉・水晶などの玉生産、樺皮・漆付須恵器など木器生産に関わる遺物も出土した。遺構は確認できていないが、付近に官衙に伴う工房があったものと推定される。

木簡は祭祀土坑の上に堆積した粘質土、および四号溝埋土の下層から出土した。

8 木簡の釈文・内容

祭祀土坑

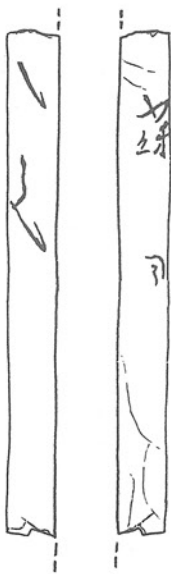
- (1) □
東殿出雲積大山
□
 $(544) \times (17) \times 9$
081
- (2) [建部上力]
□
 $(50) \times (13) \times 2$
081
- (3) ●蘇
●蘇
□
 $(133) \times (13) \times 2$
081
- (4) □
□
□
[二力]
□
 $(99) \times (8) \times 3$
081

- (5) $\begin{array}{ccc} \bullet & & \bullet \\ \square & & \square \\ & & \square \end{array}$ $(94) \times (14) \times 3$ 081
- (6) $\begin{array}{ccc} \square & & \square \\ & & \square \end{array}$ $(325) \times 56 \times 27$ 065

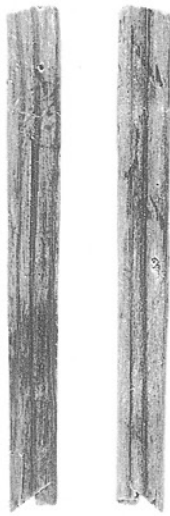
四号溝

- (7)
- ☐ ☐ ☐ ☐
- $(137) \times (26) \times 5$ 081

(1)は文書木簡である。先端は山形に加工されており、下端と右辺を欠損しているが、現状で長さ五四・四cmと非常に長い。両面に墨書があるが、判読できるのは表面のみで、建物名・人名が記されている。(2)は左辺と両端が欠損する小片で、片面に墨書がある。(3)は両面に墨書があり、片面の一部が僅かに判読できる。下端には切断痕があり、折られている。(4)は両側面が欠損し、下端は二次的に整形されており、墨書が削られている。(5)は上端に切断痕があるが、他は欠損している。両面に墨書があり、裏面にはハギトリ状の削りが見られる。(6)は木製品の表に墨書があり、三行のうち中央の行の文字が反対方向から書かれていることなどから習書されたものと見



(3)



(3)



(1)



(1)

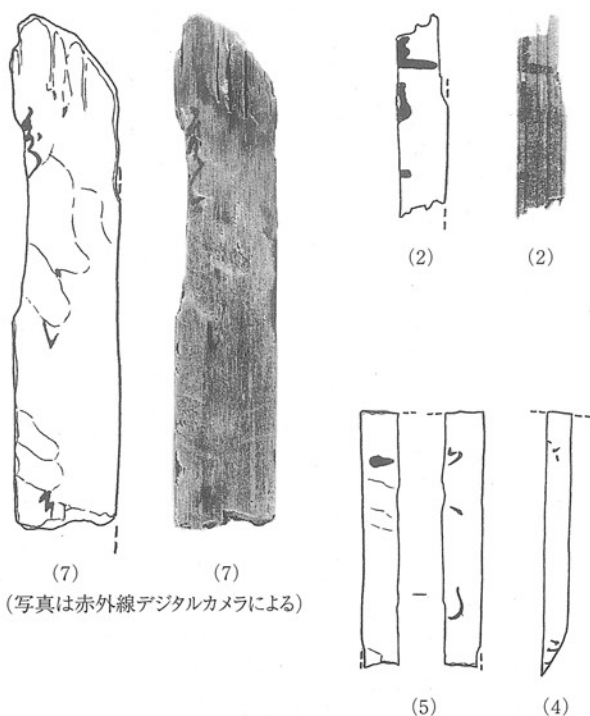


(6)



(6)

(写真は赤外線デジタルカメラによる)



られる。(7)は表に二行分の墨書が見られるが、ハギトリ状の削りにより充分に文字が判読できない。右側面以外は欠損する。

木簡の釈読にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺晃宏・馬場基氏、鳥根県古代文化センターの平石充氏からご教示を得た。

(角田徳幸)

岡山・川入・中撫川遺跡

- 1 所在地 岡山市中撫川字舟橋
- 2 調査期間 一九九九年（平11）六月～二〇〇一年三月
- 3 発掘機関 岡山市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 高橋伸二・河田健司・安川 満
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

川入・中撫川遺跡は足守川流域の沖積平野左岸に立地する。かつて足守川が「吉備穴海」にそそいだ河口付近にあたるとみられる。



(岡山南部)

これまでの調査で築地状遺構が検出され、平城宮式瓦が出土しているほか、今回の調査でも飛鳥・奈良時代の建物群や奥山久米寺式の軒丸瓦が出土するなど、立地を含め、古代の港湾的施設の可能性も指摘されている。